

(51)Int.Cl.<sup>6</sup>  
H 05 B 33/08

識別記号

府内整理番号

F I  
H 05 B 33/08

技術表示箇所

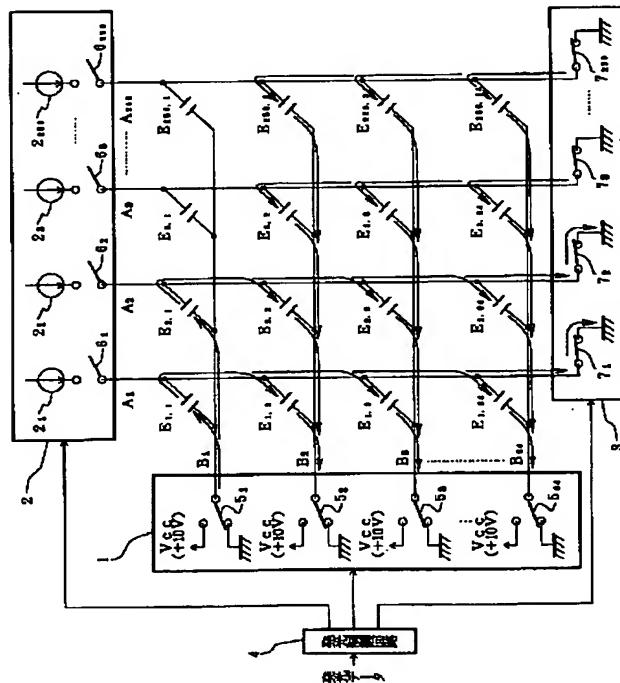
(21)出願番号 特願平8-38393  
(22)出願日 平成8年(1996)2月26日(71)出願人 000005016  
バイオニア株式会社  
東京都目黒区目黒1丁目4番1号  
(72)発明者 奥田 義行  
埼玉県鶴ヶ島市富士見6丁目1番1号 バ  
イオニア株式会社総合研究所内  
(72)発明者 石塚 真一  
埼玉県鶴ヶ島市富士見6丁目1番1号 バ  
イオニア株式会社総合研究所内  
(74)代理人 弁理士 潤野 秀雄 (外1名)

## (54)【発明の名称】発光素子の駆動方法

## (57)【要約】

【課題】 電圧印加から発光するまでの立ち上がり速度が速く、高速走査を行なうことができるとともに、駆動源の小型化が可能な発光素子の駆動方法と駆動装置を提供する。

【解決手段】 マトリックス状に配置した陽極線  $A_1$  ~  $A_{256}$  と陰極線  $B_1$  ~  $B_{64}$  の各交点位置に発光素子  $E_{1,1}$  ~  $E_{256,64}$  を接続し、陽極線と陰極線のいずれか一方の側を走査線とするとともに他方の側をドライブ線とし、走査線を所定周期で走査しながら、該走査に同期して所望のドライブ線に駆動源を接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接続された発光素子を発光させるようにした単純マトリックス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、次の走査線への切り換わり時に、すべての走査線  $B_1$  ~  $B_{64}$  を一旦同じ電位からなるリセット電圧  $0\text{ V}$  (または  $V_{cc}$  ) に接続する。



## 【特許請求の範囲】

- 【請求項1】 マトリックス状に配置した陽極線と陰極線の各交点位置に発光素子を接続し、前記陽極線と陰極線のいずれか一方の側を走査線とするとともに他方の側をドライブ線とし、走査線を所定周期で走査しながら、該走査と同期して所望のドライブ線に駆動源を接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接続された発光素子を発光させるようにした単純マトリックス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、  
次の走査線への切り換わり時に、すべての走査線を一旦同じ電位からなるリセット電圧に接続することを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項2】 請求項1記載の発光素子の駆動方法において、

前記リセット電圧がアース電位であることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項3】 請求項1記載の発光素子の駆動方法において、  
前記リセット電圧が電源電位であることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項4】 請求項1～請求項3のいずれかに記載の発光素子の駆動方法において、  
ドライブ側の駆動源をすべて省略したことを特徴とする発光素子の駆動方法。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、有機EL（エレクトロルミネッセンス）などの発光素子を発光させるための駆動方法に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 図13に、従来の発光素子の駆動方法を示す。この図13の駆動方法は、単純マトリックス駆動方式と呼ばれるもので、陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>n</sub>と陰極線B<sub>1</sub>～B<sub>n</sub>をマトリックス（格子）状に配置し、このマトリックス状に配置した陽極線と陰極線の各交点位置に発光素子E<sub>1,1</sub>～E<sub>n,n</sub>を接続し、この陽極線または陰極線のいずれか一方を一定の時間間隔で順次選択して走査するとともに、この走査に同期して他方の線を駆動源たる電流源52<sub>1</sub>～52<sub>n</sub>でドライブしてやることにより、任意の交点位置の発光素子を発光させるようにしたものである。

【0003】 前記駆動源によるドライブ方法には、陰極線走査・陽極線ドライブ、陽極線走査・陰極線ドライブの2つの方法があるが、図13は、陰極線走査・陽極線ドライブの場合を示しており、陰極線B<sub>1</sub>～B<sub>n</sub>に陰極線走査回路51を接続するとともに、陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>n</sub>に電流源52<sub>1</sub>～52<sub>n</sub>からなる陽極線ドライブ回路52を接続したものである。陰極線走査回路51は、スイッチ53<sub>1</sub>～53<sub>n</sub>を一定時間間隔で順次アース端子側へ切り換えながら走査していくことにより、陰極線B<sub>1</sub>～

～B<sub>n</sub>に対してアース電位（0V）を順次与えていく。また、陽極線ドライブ回路52は、前記陰極線走査回路51のスイッチ走査に同期してスイッチ54<sub>1</sub>～54<sub>n</sub>をオン・オフ制御することにより陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>n</sub>に電流源52<sub>1</sub>～52<sub>n</sub>を接続し、所望の交点位置の発光素子に駆動電流を供給する。

【0004】 例えば、発光素子E<sub>2,1</sub>とE<sub>3,1</sub>を発光させる場合を例に探ると、図示するように、陰極線走査回路51のスイッチ53<sub>1</sub>がアース側に切り換えられ、第1の陰極線B<sub>1</sub>にアース電位が与えられている時に、陽極線ドライブ回路52のスイッチ54<sub>2</sub>と54<sub>3</sub>を電流源側に切り換え、陽極線A<sub>2</sub>とA<sub>3</sub>に電流源52<sub>2</sub>と52<sub>3</sub>を接続してやればよい。このような走査とドライブを高速で繰り返すことにより、任意の位置の発光素子を発光させるとともに、各発光素子があたかも同時に発光しているように制御するものである。

【0005】 走査中の陰極線B<sub>1</sub>以外の他の陰極線B<sub>2</sub>～B<sub>n</sub>には電源電圧と同電位の逆バイアス電圧V<sub>α</sub>を印加してやることにより、誤発光を防止している。なお、前記図13では、駆動源として電流源52<sub>1</sub>～52<sub>n</sub>を用いたが、電圧源を用いても同様に実現することができる。

## 【0006】

【発明が解決しようとする課題】 ところで、各交点位置に接続された発光素子E<sub>2,1</sub>～E<sub>n,n</sub>のそれぞれは、図14にその等価回路を示すように、ダイオード特性からなる発光エレメントEと、これに並列接続された寄生容量Cとで表すことができるが、前述した従来の駆動方法では、この等価回路中の寄生容量Cのために次のような問題があった。

【0007】 すなわち、図15（A）（B）は、前記図13中の陽極線A<sub>1</sub>に接続された発光素子E<sub>1,1</sub>～E<sub>1,n</sub>部分だけを抜き出し、それぞれの発光素子E<sub>1,1</sub>～E<sub>1,n</sub>を前記寄生容量Cだけを用いて図示したものであるが、陰極線B<sub>1</sub>の走査時に陽極線A<sub>1</sub>がドライブされていない場合には、（A）に示すように、現在走査中の陰極線B<sub>1</sub>につながれた発光素子E<sub>1,1</sub>の寄生容量C<sub>1,1</sub>を除く他の発光素子E<sub>1,2</sub>～E<sub>1,n</sub>の寄生容量C<sub>1,2</sub>～C<sub>1,n</sub>は、各陰極線B<sub>2</sub>～B<sub>n</sub>に与えられた逆バイアス電圧V<sub>α</sub>によって図示のような向きに充電されている。

【0008】 次に、走査位置が陰極線B<sub>1</sub>から次の陰極線B<sub>2</sub>に移った際に、例えば発光素子E<sub>1,2</sub>を発光させるために陽極線A<sub>1</sub>をドライブすると、このときの回路状態は（B）に示すようなものとなり、発光させるべき発光素子E<sub>1,2</sub>の寄生容量C<sub>1,2</sub>が充電されるだけでなく、他の陰極線B<sub>3</sub>～B<sub>n</sub>に接続された発光素子E<sub>1,3</sub>～E<sub>1,n</sub>の寄生容量C<sub>1,3</sub>～C<sub>1,n</sub>に対しても矢印で示すような向きに電流が流れ込んで充電が行なわれる。

【0009】 ところで、発光素子は、その両端の電圧が規定値以上に立ち上がらない限り、正常な発光を行なう

ことができない。従来の駆動方法の場合、前記図15(A)(B)に示したように、陰極線B<sub>2</sub>に接続された発光素子E<sub>1,2</sub>を発光させるために陽極線A<sub>1</sub>をドライブすると、発光させるべき発光素子E<sub>1,2</sub>の寄生容量C<sub>1,2</sub>だけでなく、陽極線A<sub>1</sub>に接続された他の発光素子E<sub>1,3</sub>～E<sub>1,n</sub>の寄生容量C<sub>1,3</sub>～C<sub>1,n</sub>に対しても充電が行なわれ、これらすべての発光素子の寄生容量の充電が完了するまでは、陰極線B<sub>2</sub>につながれた発光素子E<sub>1,2</sub>の両端電圧は規定値以上に立ち上がることができない。

【0010】このため、従来の駆動方法の場合、前記寄生容量のため、発光するまでの立ち上がり速度が遅く、高速走査ができないという問題があった。また、陽極線に接続されたすべての発光素子の寄生容量を充電してやらねばならないため、各陽極線に接続するドライブ用の駆動源の電流容量も大きなものとせざるを得ず、回路の小型化という点からも一考の余地があった。

【0011】前記問題は、発光素子の数が増えれば増えるほど大きくなる。特に、発光素子として有機ELを用いた場合、有機ELは面発光のために前記寄生容量Cが大きく、前記問題はさらに顕著なものとなる。本発明は、上記のような問題を解決するためになされたもので、その目的とするところは、駆動電流の供給開始から発光するまでの立ち上がり速度が速く、高速走査を行なうことができるとともに、駆動源の小型化が可能な発光素子の駆動方法と駆動装置を提供することである。

### 【0012】

【課題を解決するための手段】前記課題を解決するため、本発明では次のような手段を採用した。すなわち、請求項1記載の発明は、マトリックス状に配置した陽極線と陰極線の各交点位置に発光素子を接続し、前記陽極線と陰極線のいずれか一方の側を走査線とするとともに他方の側をドライブ線とし、走査線を所定周期で走査しながら、該走査と同期して所望のドライブ線に駆動源を接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接続された発光素子を発光させるようにした単純マトリックス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、次の走査線への切り換わり時に、すべての走査線を一旦同じ電位からなるリセット電圧に接続することを特徴とするものである。

【0013】また、請求項2記載の発明は、前記請求項1記載の発明において、前記リセット電圧がアース電位であることを特徴とするものである。

【0014】また、請求項3記載の発明は、前記請求項1記載の発明において、前記リセット電圧が電源電位であることを特徴とするものである。

【0015】また、請求項4記載の発明は、前記請求項1～請求項3のいずれかに記載の発明において、ドライブ線側の駆動源をすべて省略したことを特徴とするものである。

【0016】上記のような構成とした場合、すべての走査線にリセットをかけた後、走査位置を次の走査線に切り換えると、発光させるべき発光素子の寄生容量は、ドライブ線を介して駆動源により充電されるとともに、発光されない他の発光素子の寄生容量を通じて走査線の逆バイアス電圧によっても同時に充電される。このため、発光させるべき発光素子は、その両端電圧が瞬時に発光可能な電位まで立ち上がる所以、瞬時に発光することができる。

【0017】また、ドライブ線側の駆動源を省略した場合でも、発光させるべき発光素子の寄生容量は、発光されない他の発光素子の寄生容量を通じて走査線の逆バイアス電圧によって充電され、短時間だけ発光される。したがって、この発光時間よりも短い周期で走査を行なわせることにより、ドライブ線側の駆動源を省略しながら、発光素子をあたかも連続発光しているように点灯制御することができる。

### 【0018】

【発明の実施の形態】以下、本発明の実施の形態について図面を参照して説明する。図1～図4に、本発明に係る第1の駆動方法を示す。この第1の駆動方法は、走査が次の陰極線へ移る際に、すべての陰極線とすべての陽極線を一度アース電位(0V)に落としてリセットするようにした場合の例である。

【0019】図1～図4において、A<sub>1</sub>～A<sub>256</sub>は陽極線、B<sub>1</sub>～B<sub>64</sub>は陰極線、E<sub>1,1</sub>～E<sub>256,64</sub>は各交点位置につながれた発光素子、1は陰極線走査回路、2は陽極線ドライブ回路、3は陽極リセット回路、4は発光制御回路である。

【0020】陰極線走査回路1は、各陰極線B<sub>1</sub>～B<sub>64</sub>を順次に走査するための走査スイッチ5<sub>1</sub>～5<sub>64</sub>を備えている。各走査スイッチ5<sub>1</sub>～5<sub>64</sub>の一方の端子は電源電圧からなる逆バイアス電圧V<sub>cc</sub>(例えば、10V)に接続されるとともに、他方の端子はアース電位(0V)にそれぞれ接続されている。

【0021】陽極ドライブ回路2は、駆動源たる電流源2<sub>1</sub>～2<sub>256</sub>と、各陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>256</sub>を選択するためのドライブスイッチ6<sub>1</sub>～6<sub>256</sub>とを備えており、任意のドライブスイッチをオンすることにより、当該陽極線40に対してドライブ用の電流源2<sub>1</sub>～2<sub>256</sub>を接続する。

【0022】また、陽極リセット回路3は、陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>256</sub>をアース電位(0V)へリセットするためのシャントスイッチ7<sub>1</sub>～7<sub>256</sub>を備えている。

【0023】なお、これらの走査スイッチ5<sub>1</sub>～5<sub>64</sub>、ドライブスイッチ6<sub>1</sub>～6<sub>256</sub>およびシャントスイッチ7<sub>1</sub>～7<sub>256</sub>のオン・オフは、発光制御回路4によって制御される。

【0024】次に、前記図1～図4を参照して、第1の駆動方法による発光動作について説明する。なお、以下50に述べる動作は、陰極線B<sub>1</sub>を走査して発光素子E<sub>1,1</sub>

と  $E_{2,1}$  を光らせた後、陰極線  $B_2$  に走査を移して発光素子  $E_{2,2}$  と  $E_{3,2}$  を光らせる場合を例に探って説明する。また、説明を分かり易くするために、光っている発光素子についてはダイオード記号で示し、光っていない発光素子についてはコンデンサ記号で示した。また、陰極線  $B_1$  ～  $B_{64}$  に印加する逆バイアス電圧  $V_{cc}$  は、装置の電源電圧と同じ 10 V とした。

【0025】まず、図 1 では、走査スイッチ  $5_1$  が 0 V 側に切り換えられ、陰極線  $B_1$  が走査されている。他の陰極線  $B_2$  ～  $B_{64}$  には、走査スイッチ  $5_2$  ～  $5_{64}$  により逆バイアス電圧 10 V が印加されている。さらに、陽極線  $A_1$  と  $A_2$  には、ドライブスイッチ  $6_1$  と  $6_2$  によって電流源  $5_1$  、  $5_2$  が接続されている。また、他の陽極線  $A_3$  ～  $A_{256}$  には、シャントスイッチ  $7_3$  ～  $7_{256}$  によって 0 V が与えられている。

【0026】したがって、図 1 の場合、発光素子  $E_{1,1}$  と  $E_{2,1}$  のみが準方向にバイアスされ、電流源  $5_1$  と  $5_2$  から矢印のように駆動電流が流れ込み、発光素子  $E_{1,1}$  と  $E_{2,1}$  のみが発光している。この図 1 の状態では、コンデンサにハッチングして示した発光素子は、それぞれ図のような極性の向きに充電された状態となっている。この図 1 の発光状態から図 4 の発光素子  $E_{2,2}$  と  $E_{3,2}$  が発光する状態に走査を移行する際に、以下のようなりセット制御が行なわれる。

【0027】すなわち、走査が図 1 の陰極線  $B_1$  から図 4 の陰極線  $B_2$  に移行する前に、まず、図 2 に示すように、すべてのドライブスイッチ  $5_1$  ～  $5_{64}$  をオフとともに、すべての走査スイッチ  $5_1$  ～  $5_{64}$  とすべてのシャントスイッチ  $7_1$  ～  $7_{256}$  を 0 V 側に切り換え、陽極線  $A_1$  ～  $A_{256}$  と陰極線  $B_1$  ～  $B_{64}$  のすべてを一旦 0 V にシャントし、0 V によるオールリセットをかける。この 0 V へのオールリセットが行なわれると、陽極線と陰極線のすべてが 0 V の同電位となるので、各発光素子に充電されていた電荷は図中の矢印で示すようなルートを通って放電し、すべての発光素子の充電電荷が瞬時のうちに 0 となる。

【0028】前記のようにして、すべての発光素子の充電電荷を 0 にした後、図 3 に示すように、陰極線  $B_2$  に対応する走査スイッチ  $5_2$  のみを 0 V 側に切り換え、陰極線  $B_2$  の走査を行なう。これと同時に、ドライブスイッチ  $6_2$  と  $6_3$  のみを電流源  $2_2$  と  $2_3$  側に切り換えるとともに、シャントスイッチ  $7_1$  、  $7_4$  ～  $7_{256}$  をオンし、陽極線  $A_1$  、  $A_4$  ～  $A_{256}$  に 0 V を与える。

【0029】上記スイッチの切り換えによって陰極線  $B_2$  の走査が行なわれると、前述したようにすべての発光素子の充電電荷は 0 とされているので、次に発光させるべき発光素子  $E_{2,2}$  と  $E_{3,2}$  には、図 3 中に矢印で示したような複数のルートで充電電流が一気に流れ込み、それぞれの発光素子の寄生容量 C が瞬時に充電される。

【0030】すなわち、発光素子  $E_{2,2}$  には、電流源 2

$2$  → ドライブスイッチ  $6_2$  → 陽極線  $A_2$  → 発光素子  $E_{2,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ  $5_1$  → 陰極線  $B_1$  → 発光素子  $E_{2,1}$  → 発光素子  $E_{2,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルート、走査スイッチ  $5_3$  → 陰極線  $B_3$  → 発光素子  $E_{2,3}$  → 発光素子  $E_{2,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルート、・・・、走査スイッチ  $5_{64}$  → 陰極線  $B_{64}$  → 発光素子  $E_{2,64}$  → 発光素子  $E_{2,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子  $E_{2,2}$  はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図 4 に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0031】また、発光素子  $E_{3,2}$  には、電流源  $2_3$  → ドライブスイッチ  $6_3$  → 陽極線  $A_3$  → 発光素子  $E_{3,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  の通常のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ  $5_1$  → 陰極線  $B_1$  → 発光素子  $E_{3,1}$  → 発光素子  $E_{3,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルート、走査スイッチ  $5_3$  → 陰極線  $B_3$  → 発光素子  $E_{3,3}$  → 発光素子  $E_{3,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルート、・・・、走査スイッチ  $5_{64}$  → 陰極線  $B_{64}$  → 発光素子  $E_{3,64}$  → 発光素子  $E_{3,2}$  → 走査スイッチ  $5_2$  のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子  $E_{3,2}$  はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図 4 に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0032】以上述べたように、第 1 の駆動方法は、次の走査に移行する前に、陰極線と陽極線のすべてを一旦アース電位である 0 V に接続してリセットするようにしたので、次の走査線に切り換えられた際に、切り換えられた走査線上の発光素子を瞬時に発光させることができる。

【0033】なお、前記発光させるべき発光素子  $E_{2,2}$  、  $E_{3,2}$  以外の他の発光素子についても、図 3 中に矢印で示したようなルートでそれぞれ充電が行なわれるが、これらの充電方向は逆バイアス方向であるので、発光素子  $E_{2,2}$  、  $E_{3,2}$  以外の他の発光素子が誤発光するおそれはない。

【0034】前記図 1 ～ 図 4 の例では、駆動源として電流源  $2_1$  ～  $2_{256}$  を用いた場合を示したが、電圧源を用いても同様に実現することができる。

【0035】図 5 ～ 図 8 に、本発明に係る第 2 の駆動方法を示す。この第 2 の駆動方法は、次の陰極線へ走査が移る前に、陰極線と陽極線のすべてを一度電源電圧  $V_{cc} = 10$  V にリセットするようにした場合の例である。このリセット方法を実現するために、図 5 ～ 図 8 の回路では、ドライブスイッチ  $6_1$  ～  $6_{256}$  として 3 点切換スイッチを用い、第 1 の接点は開放とし、第 2 の接点は電流源  $2_1$  ～  $2_{256}$  に、第 3 の接点は電源電圧  $V_{cc} = 10$  V にそれぞれ接続したものである。なお、このドライブスイッチ  $6_1$  ～  $6_{256}$  以外の他の部分の回路構成は、前述した第 1 の駆動方法の場合と同じであるので、その説明は省略する。

【0036】次に、前記図5～図8を参照して、第2の駆動方法による発光動作について説明する。なお、以下に述べる動作は、前述した第1の駆動方法と同様に、陰極線B<sub>1</sub>を走査して発光素子E<sub>1,1</sub>とE<sub>1,2</sub>を光らせた後、陰極線B<sub>2</sub>に走査を移して発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>を光させる場合を例に採る。

【0037】まず、図5では、走査スイッチ5<sub>1</sub>が0V側に切り換えられ、陰極線B<sub>1</sub>が走査されている。他の陰極線B<sub>2</sub>～B<sub>64</sub>には、走査スイッチ5<sub>2</sub>～5<sub>64</sub>により逆バイアス電圧10Vが印加されている。さらに、陽極線A<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>には、ドライブスイッチ6<sub>1</sub>と6<sub>2</sub>によって電流源5<sub>1</sub>、5<sub>2</sub>が接続されている。また、他の陽極線A<sub>3</sub>～A<sub>256</sub>には、シャントスイッチ7<sub>3</sub>～7<sub>256</sub>によって0Vが与えられている。

【0038】したがって、図5の場合、発光素子E<sub>1,1</sub>とE<sub>2,1</sub>のみが準方向にバイアスされ、電流源5<sub>1</sub>と5<sub>2</sub>から矢印のように駆動電流が流れ込み、発光素子E<sub>1,1</sub>とE<sub>2,1</sub>のみが発光している。この図5の状態では、コンデンサにハッキングして示した発光素子は、それぞれ図のような極性の向きに充電された状態となっている。この図5の発光状態から図8の発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>が発光する状態に走査を移行する際に、以下のようなりセット制御が行なわれる。

【0039】すなわち、走査が図5の陰極線B<sub>1</sub>から図8の陰極線B<sub>2</sub>に移行する前に、まず、図6に示すように、すべてのシャントスイッチ7<sub>1</sub>～7<sub>256</sub>をオフするとともに、すべての走査スイッチ5<sub>1</sub>～5<sub>64</sub>と、すべてのドライブスイッチ6<sub>1</sub>～6<sub>256</sub>を10V側に切り換え、陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>256</sub>と陰極線B<sub>1</sub>～B<sub>64</sub>のすべてを一旦10Vにシャントし、10Vによるオールリセットをかける。この10Vへのオールリセットが行なわれると、陽極線と陰極線のすべてが10Vの同電位となるので、各発光素子に充電されていた電荷は図中の矢印で示すようなルートを通過して放電し、すべての発光素子の充電電荷が瞬時のうちに0となる。

【0040】前記のようにして、すべての発光素子の充電電荷を0にした後、図7に示すように、陰極線B<sub>2</sub>に対応する走査スイッチ5<sub>2</sub>のみを0V側に切り換え、陰極線B<sub>2</sub>の走査を行なう。これと同時に、ドライブスイッチ6<sub>2</sub>と6<sub>3</sub>を電流源2<sub>2</sub>と2<sub>3</sub>側に切り換えるとともに、他のドライブスイッチ6<sub>1</sub>、6<sub>4</sub>～6<sub>256</sub>については開放端側に切り換える。さらに、シャントスイッチ7<sub>1</sub>、7<sub>4</sub>～7<sub>256</sub>をオンし、陽極線A<sub>1</sub>、A<sub>4</sub>～A<sub>256</sub>に0Vを与える。

【0041】上記スイッチの切り換えによって陰極線B<sub>2</sub>の走査が行なわれると、前述したようにすべての発光素子の充電電荷は0とされているので、次に発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>には、図7中に矢印で示したような複数のルートで充電電流が一気に流れ込み、それぞれの発光素子の寄生容量Cが瞬時に充電される。

【0042】すなわち、発光素子E<sub>2,2</sub>には、電流源2<sub>2</sub>～ドライブスイッチ6<sub>2</sub>～陽極線A<sub>2</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ5<sub>1</sub>～陰極線B<sub>1</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、走査スイッチ5<sub>3</sub>～陰極線B<sub>3</sub>～発光素子E<sub>2,3</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、・・・、走査スイッチ5<sub>64</sub>～陰極線B<sub>64</sub>～発光素子E<sub>2,64</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子E<sub>2,2</sub>はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図8に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0043】また、発光素子E<sub>3,2</sub>には、電流源2<sub>3</sub>～ドライブスイッチ6<sub>3</sub>～陽極線A<sub>3</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>の通常のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ5<sub>1</sub>～陰極線B<sub>1</sub>～発光素子E<sub>3,1</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、走査スイッチ5<sub>3</sub>～陰極線B<sub>3</sub>～発光素子E<sub>3,3</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、・・・、走査スイッチ5<sub>64</sub>～陰極線B<sub>64</sub>～発光素子E<sub>3,64</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子E<sub>3,2</sub>はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図8に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0044】以上述べたように、第2の駆動方法は、次の走査に移行する前に、陰極線と陽極線のすべてを一旦電源電圧である10Vに接続してリセットするようにしたので、次の走査線に切り換えられた際に、切り換えられた走査線上の発光素子を瞬時に発光させることができる。

【0045】なお、前記発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>、E<sub>3,2</sub>以外の他の発光素子についても、図3中に矢印で示したようなルートでそれぞれ充電が行なわれるが、これらの充電方向は逆バイアス方向であるので、発光素子E<sub>2,2</sub>、E<sub>3,2</sub>以外の他の発光素子が誤発光するおそれはない。

【0046】前記図5～図8の例では、駆動源として電流源2<sub>1</sub>～2<sub>256</sub>を用いた場合を示したが、電圧源を用いても同様に実現することができる。

【0047】図9～図12に、本発明に係る第3の駆動方法を示す。この第3の駆動方法は、次の陰極線へ走査が移る前に、すべての陰極線B<sub>1</sub>～B<sub>64</sub>を10Vにオールリセットするとともに、陽極線A<sub>1</sub>～A<sub>256</sub>については次の発光に備えてプリセットするようにした場合の例である。なお、回路構成自体は前述した第2の駆動方法の場合と同じであるので、その説明は省略する。

【0048】次に、前記図9～図12を参照して、第3の駆動方法による発光動作について説明する。なお、以下に述べる動作は、前述した第1および第2の駆動方法と同じく、陰極線B<sub>1</sub>を走査して発光素子E<sub>1,1</sub>とE

1.2 を光らせた後、陰極線B<sub>2</sub>に走査を移して発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>を光らせる場合を例に採る。

【0049】まず、図9では、走査スイッチ5<sub>1</sub>が0V側に切り換えられ、陰極線B<sub>1</sub>が走査されている。他の陰極線B<sub>2</sub>～B<sub>64</sub>には、走査スイッチ5<sub>2</sub>～5<sub>64</sub>により逆バイアス電圧10Vが印加されている。さらに、陽極線A<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>には、ドライブスイッチ6<sub>1</sub>と6<sub>2</sub>によって電流源5<sub>1</sub>、5<sub>2</sub>が接続されている。また、他の陽極線A<sub>3</sub>～A<sub>256</sub>には、シャントスイッチ7<sub>3</sub>～7<sub>256</sub>によって0Vが与えられている。

【0050】したがって、図9の場合、発光素子E<sub>1,1</sub>とE<sub>2,1</sub>のみが準方向にバイアスされ、電流源5<sub>1</sub>と5<sub>2</sub>から矢印のように駆動電流が流れ込み、発光素子E<sub>1,1</sub>とE<sub>2,1</sub>のみが発光している。この図9の状態では、コンデンサにハッキングして示した発光素子は、それぞれ図のような極性の向きに充電された状態となっている。この図9の発光状態から図12の発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>が発光する状態に走査を移行する際に、以下のようなリセット制御が行なわれる。

【0051】すなわち、走査が図9の陰極線B<sub>1</sub>から図12の陰極線B<sub>2</sub>に移行する前に、まず、図10に示すように、すべての走査スイッチ5<sub>1</sub>～5<sub>64</sub>を10V側に切り換え、オールリセットをかける。さらに、陽極線については、次に発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>2,3</sub>に対応するドライブスイッチ6<sub>2</sub>と6<sub>3</sub>のみを10V側に接続してプリセットし、他のドライブスイッチ6<sub>1</sub>、6<sub>4</sub>～6<sub>256</sub>については開放端側に接続する。また、シャントスイッチ7<sub>1</sub>、7<sub>4</sub>～7<sub>256</sub>をオンし、0Vに接続する。

【0052】この陽極線B<sub>1</sub>～B<sub>64</sub>の10Vへのオールリセットと、陽極線A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>の電源電圧10Vへのプリセットが行なわれると、各発光素子に充電されていた電荷は図中の矢印で示すようなルートを通って充放電し、次に発光させるべき陽極線A<sub>2</sub>とA<sub>3</sub>に接続された発光素子E<sub>2,1</sub>～E<sub>2,64</sub>、E<sub>3,1</sub>～E<sub>3,64</sub>の充電電荷が瞬時のうちに0となる。

【0053】前記のようにして、発光素子E<sub>2,1</sub>～E<sub>2,64</sub>とE<sub>3,1</sub>～E<sub>3,64</sub>の充電電荷を0にした後、図11に示すように、走査スイッチ5<sub>2</sub>を0V側に切り換え、陰極線B<sub>2</sub>の走査を行なう。これと同時に、ドライブスイッチ6<sub>2</sub>と6<sub>3</sub>を電流源2<sub>2</sub>と2<sub>3</sub>側に切り換える。

【0054】上記スイッチの切り換えによって陰極線B<sub>2</sub>の走査が行なわれると、発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>には、図11中に矢印で示したような複数のルートで充電電流が一気に流れ込み、それぞれの発光素子の寄生容量Cが瞬時に充電される。

【0055】すなわち、発光素子E<sub>2,2</sub>には、電流源2<sub>2</sub>～ドライブスイッチ6<sub>2</sub>～陽極線A<sub>2</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ5<sub>1</sub>～陰極線B<sub>1</sub>～発光素子E<sub>2,1</sub>

→発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、走査スイッチ5<sub>3</sub>～陰極線B<sub>3</sub>～発光素子E<sub>2,3</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、・・・、走査スイッチ5<sub>64</sub>～陰極線B<sub>64</sub>～発光素子E<sub>2,64</sub>～発光素子E<sub>2,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子E<sub>2,2</sub>はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図12に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0056】また、発光素子E<sub>3,2</sub>には、電流源2<sub>3</sub>～ドライブスイッチ6<sub>3</sub>～陽極線A<sub>3</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>の通常のルートで充電電流が流れ込むとともに、走査スイッチ5<sub>1</sub>～陰極線B<sub>1</sub>～発光素子E<sub>3,1</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、走査スイッチ5<sub>3</sub>～陰極線B<sub>3</sub>～発光素子E<sub>3,3</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルート、・・・、走査スイッチ5<sub>64</sub>～陰極線B<sub>64</sub>～発光素子E<sub>3,64</sub>～発光素子E<sub>3,2</sub>～走査スイッチ5<sub>2</sub>のルートからも同時に充電電流が流れ込み、発光素子E<sub>3,2</sub>はこれら複数の充電電流によって瞬時に充電されて発光し、図12に示す定常状態に瞬時に移行する。

【0057】以上述べたように、第3の駆動方法は、次の走査に移行する前に、すべての陰極線を10Vにリセットするとともに、陽極線は次の発光に備えてプリセットしたので、次の走査線に切り換えられた際に、切り換えられた走査線上の発光素子を瞬時に発光させることができる。

【0058】なお、前記発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>、E<sub>3,2</sub>以外の他の発光素子についても、図11中に矢印で示したようなルートでそれぞれ充電が行なわれるが、これらの充電方向は逆バイアス方向であるので、発光素子E<sub>2,2</sub>、E<sub>3,2</sub>以外の他の発光素子が誤発光するおそれはない。

【0059】また、前記第3の駆動方法は、すべての陰極線を10Vにリセットするようにしたが、これに代えてすべての陰極線を0Vにリセットしてもよい。

【0060】また、前記図9～図12の例は、駆動源として電流源2<sub>1</sub>～2<sub>256</sub>を用いた場合を示したが、電圧源を用いても同様に実現することができる。

【0061】ところで、前述した図3、図7、図10の各図を参照すれば明らかのように、本発明の駆動方法によるときは、次の走査に移った際、次に発光させるべき発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>は、電流源2<sub>2</sub>、2<sub>3</sub>だけから充電されるだけでなく、逆バイアス電圧を与えられた陰極線B<sub>1</sub>、B<sub>3</sub>～B<sub>64</sub>から陽極線A<sub>2</sub>、A<sub>3</sub>に接続された他の発光素子を通じても同時に充電される。

【0062】このため、陽極線に接続された発光素子の数が多い場合には、この他の発光素子を介した充電電流だけによっても発光素子E<sub>2,2</sub>とE<sub>3,2</sub>は短時間ではあるが発光することができる。したがって、このような場合には、他の発光素子を介した充電電流による発光継続

時間よりも短い周期で陰極線を走査すれば、陽極ドライブ回路2の電流源 $2_1 \sim 2_{256}$ を不要とすることができます。

【0063】さらに、前記例は、陰極走査・陽極ドライブ方式の場合を例にとって説明したが、陽極走査・陰極ドライブ方式でも同様に実施できることは当然である。

【0064】

【発明の効果】以上説明したように、請求項1～請求項3記載の発明によるときは、すべての走査線にリセットをかけた後、走査位置を次の走査線に切り換えることにより、発光させるべき発光素子の寄生容量をドライブ線を介して駆動源で充電するとともに、発光されない他の発光素子の寄生容量を通じて走査線の逆バイアス電圧によっても同時に充電するようにしたので、発光させるべき発光素子の両端電圧を瞬時に発光可能な電位まで立ち上がりさせることができ、発光素子を瞬時に発光させることができる。また、他の発光素子を介した充電を利用しているため、個々の駆動源の容量を小さくすることができ、駆動装置を小型化することが可能である。

【0065】さらに、請求項4記載の発明によるときは、ドライブ線側の駆動源をすべて省略しながら高速に発光できるようにしたので、駆動装置をさらに簡潔かつ小型化することが可能である。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の第1の駆動方法の第1ステップの説明図である。

【図2】本発明の第1の駆動方法の第2ステップの説明図である。

【図3】本発明の第1の駆動方法の第3ステップの説明図である。

【図4】本発明の第1の駆動方法の第4ステップの説明図である。

【図5】本発明の第2の駆動方法の第1ステップの説明\*

\*図である。

【図6】本発明の第2の駆動方法の第2ステップの説明図である。

【図7】本発明の第2の駆動方法の第3ステップの説明図である。

【図8】本発明の第2の駆動方法の第4ステップ説明図である。

【図9】本発明の第3の駆動方法の第1ステップの説明図である。

10 【図10】本発明の第3の駆動方法の第2ステップの説明図である。

【図11】本発明の第3の駆動方法の第3ステップの説明図である。

【図12】本発明の第3の駆動方法の第4ステップの説明図である。

【図13】従来の駆動方法の説明図である。

【図14】発光素子の等価回路を示す図である。

【図15】従来の駆動方法における走査移行時の充放電状態の説明図である。

20 【符号の説明】

1 陰極線走査回路

2 陽極線ドライブ回路

$2_1 \sim 2_{256}$  電流源(駆動源)

3 陽極リセット回路

4 発光制御回路

5<sub>1</sub> ~ 5<sub>64</sub> 走査スイッチ

6<sub>1</sub> ~ 6<sub>256</sub> ドライブスイッチ

7<sub>1</sub> ~ 7<sub>256</sub> シャントスイッチ

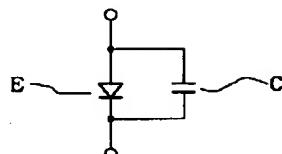
A<sub>1</sub> ~ A<sub>256</sub> 陽極線(ドライブ線)

30 B<sub>1</sub> ~ B<sub>64</sub> 陰極線(走査線)

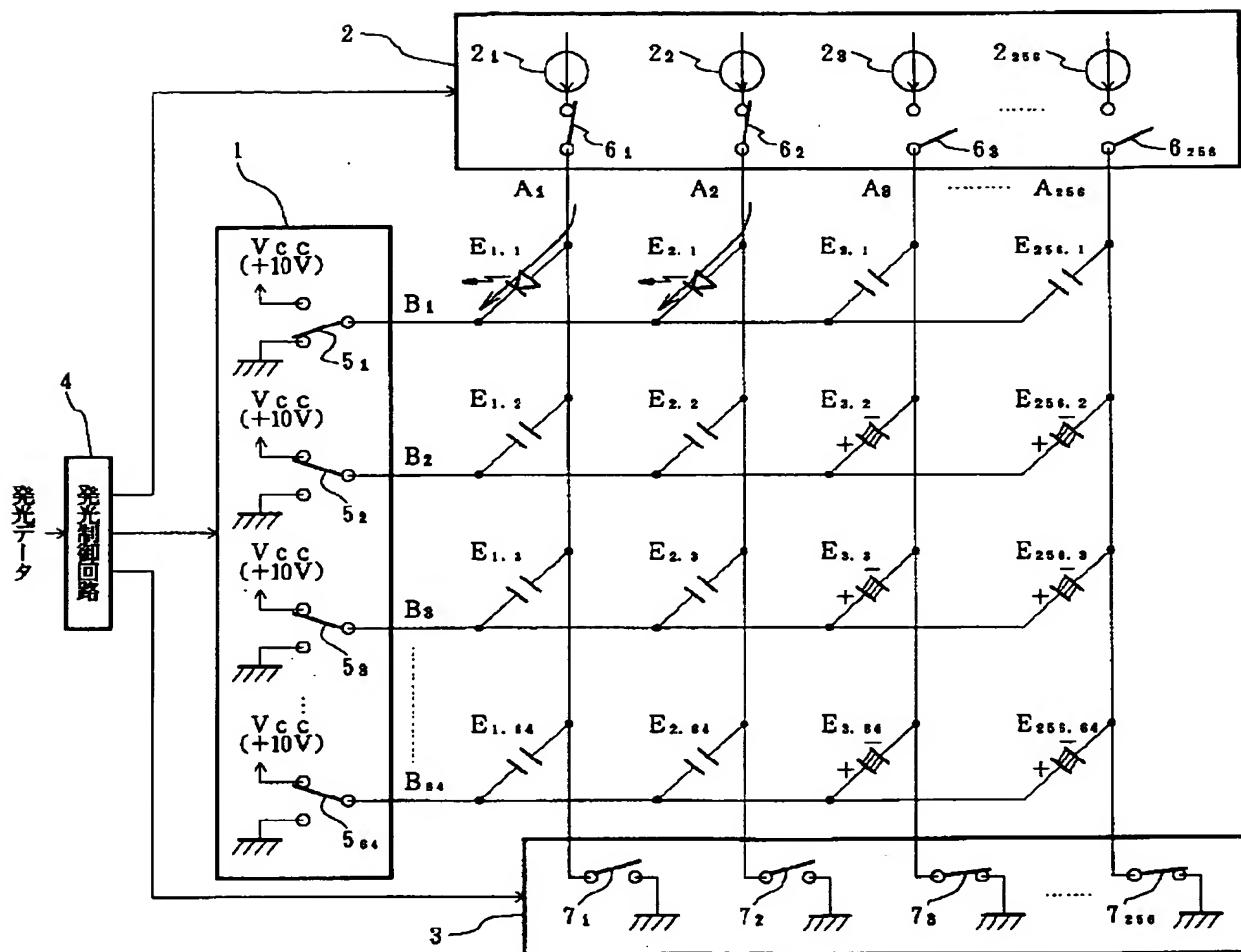
E<sub>1,1</sub> ~ E<sub>256,64</sub> 発光素子

V<sub>cc</sub> 電源電圧

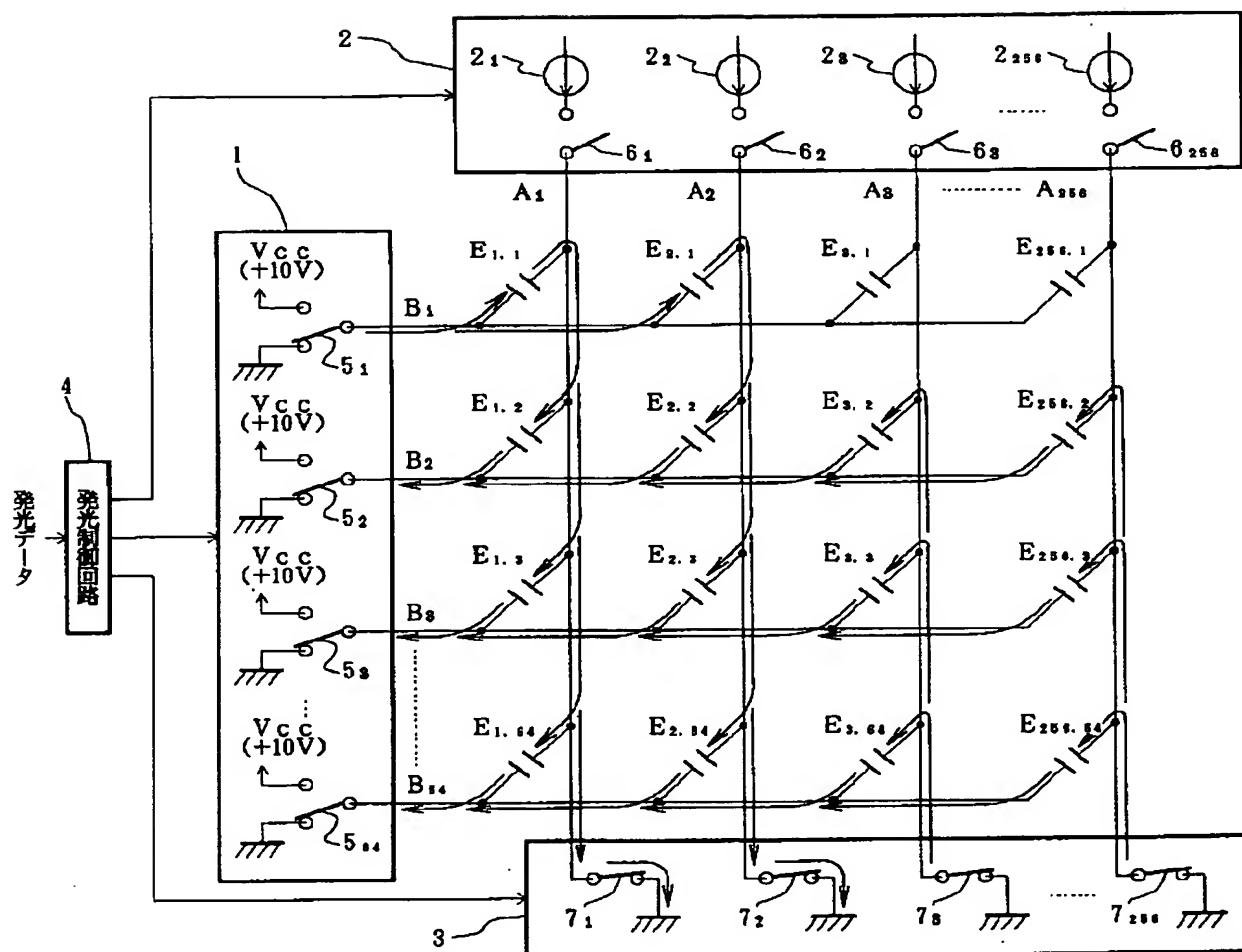
【図14】



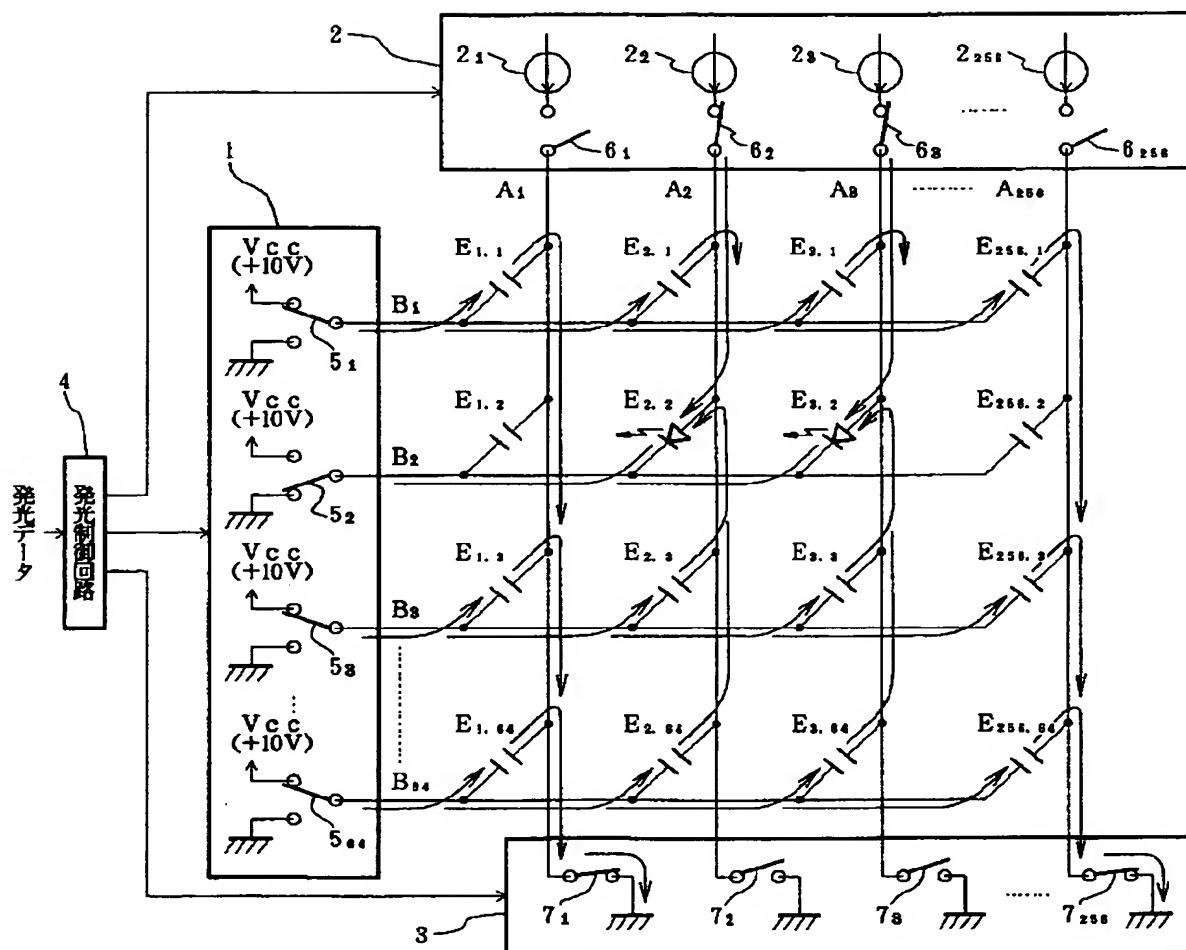
【図1】



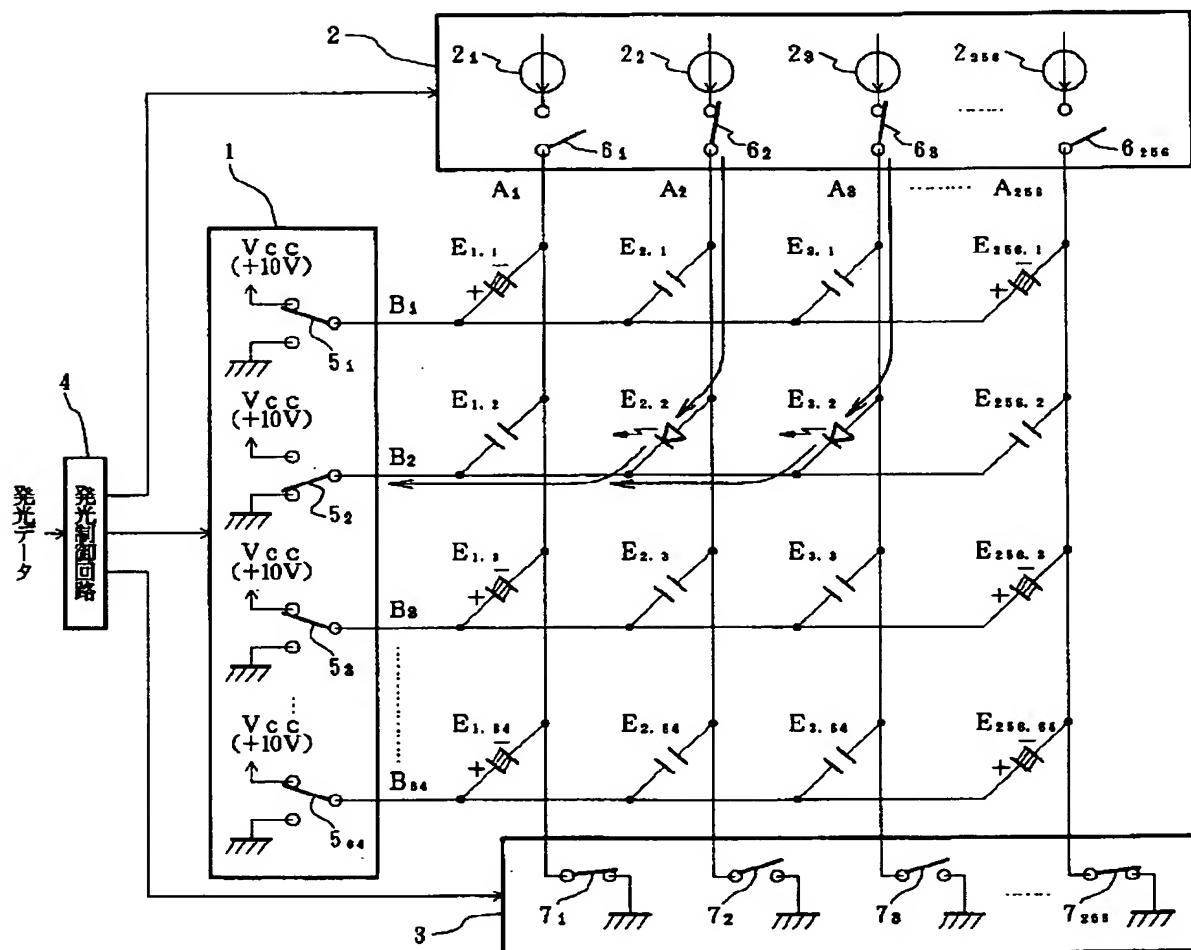
【図2】



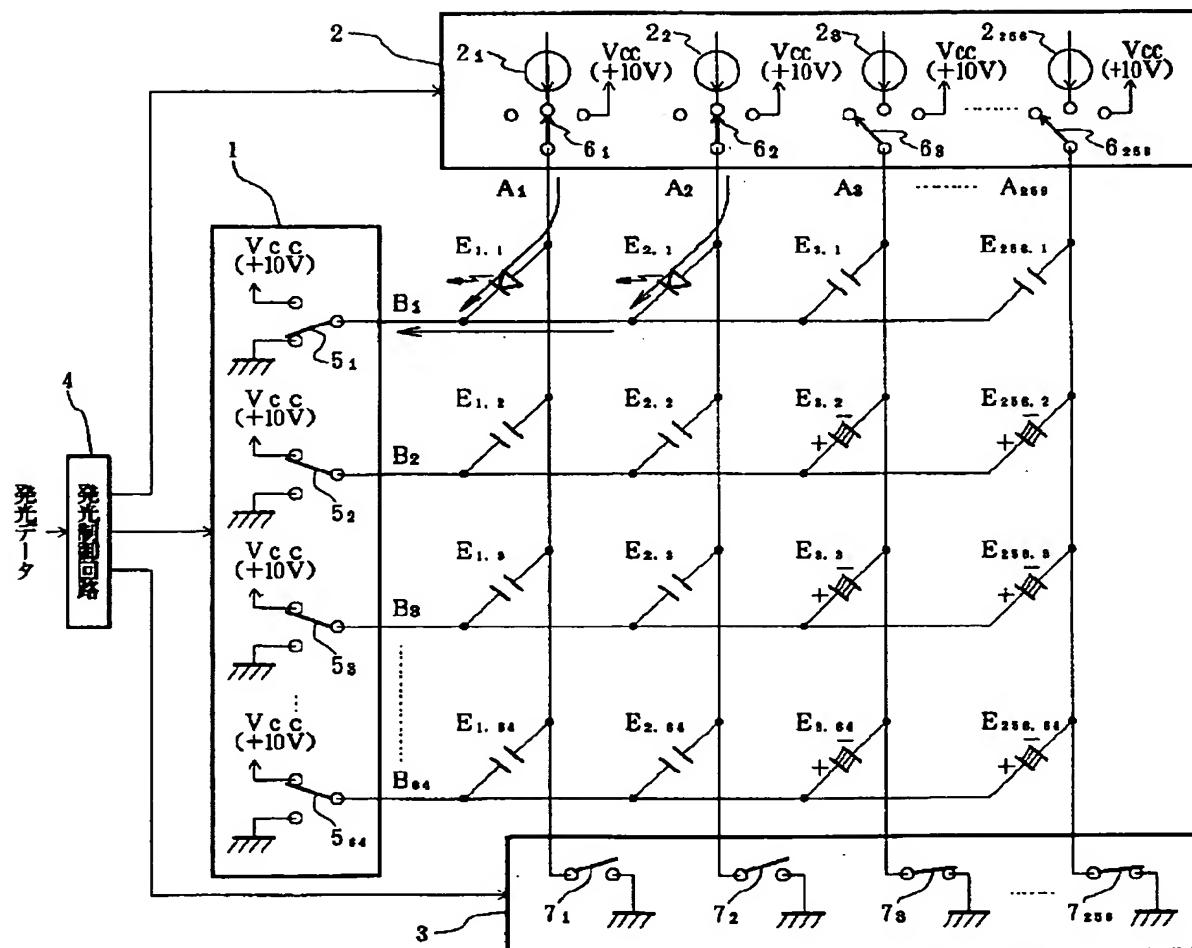
【図3】



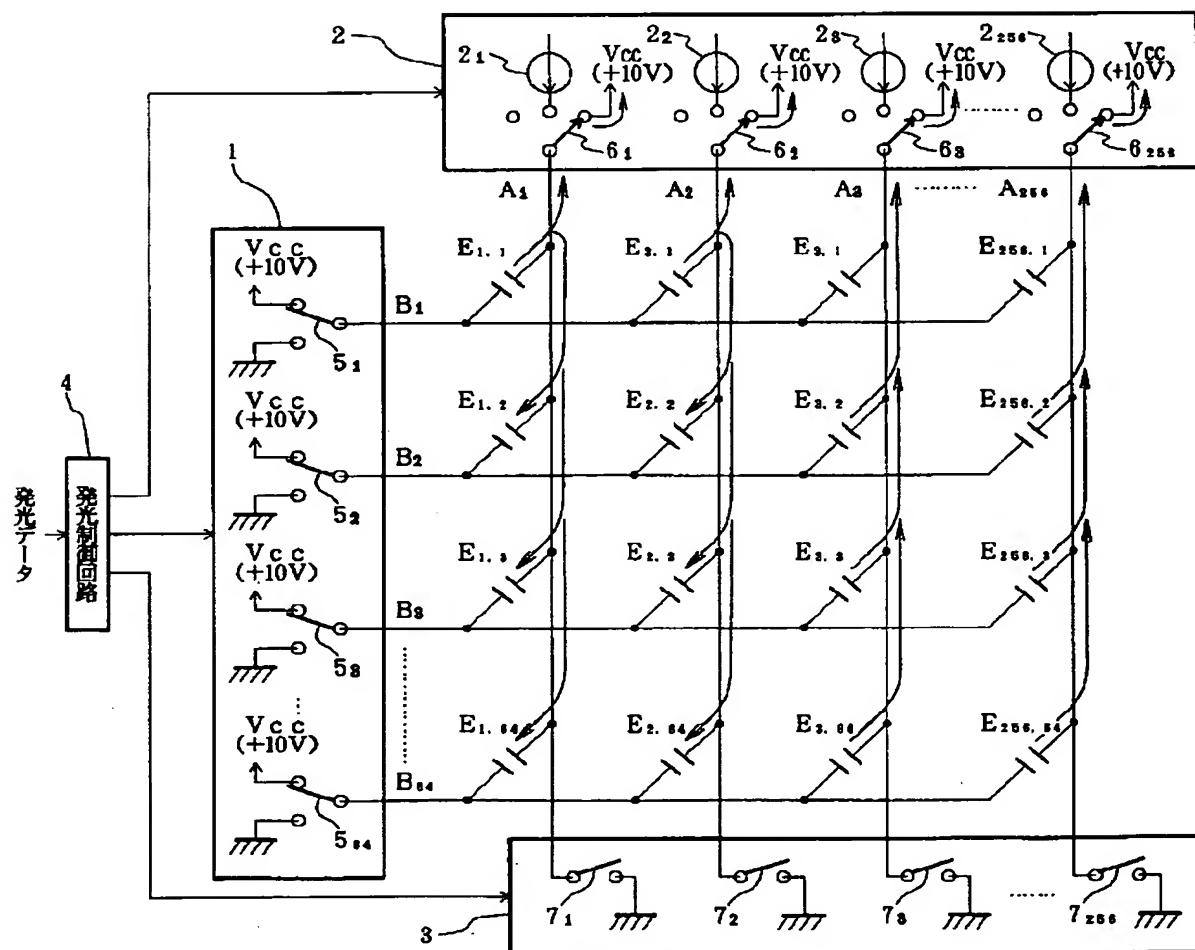
【図4】



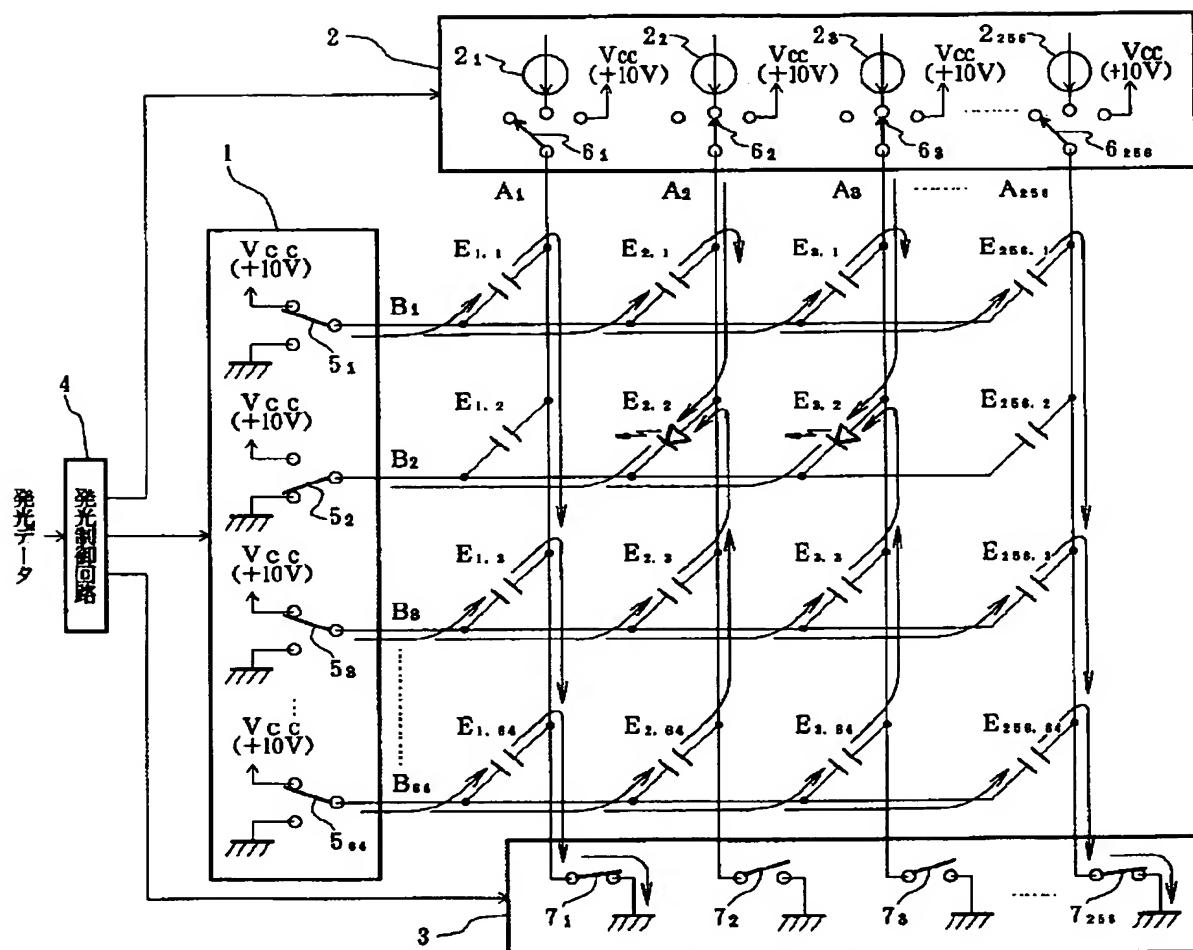
【図5】



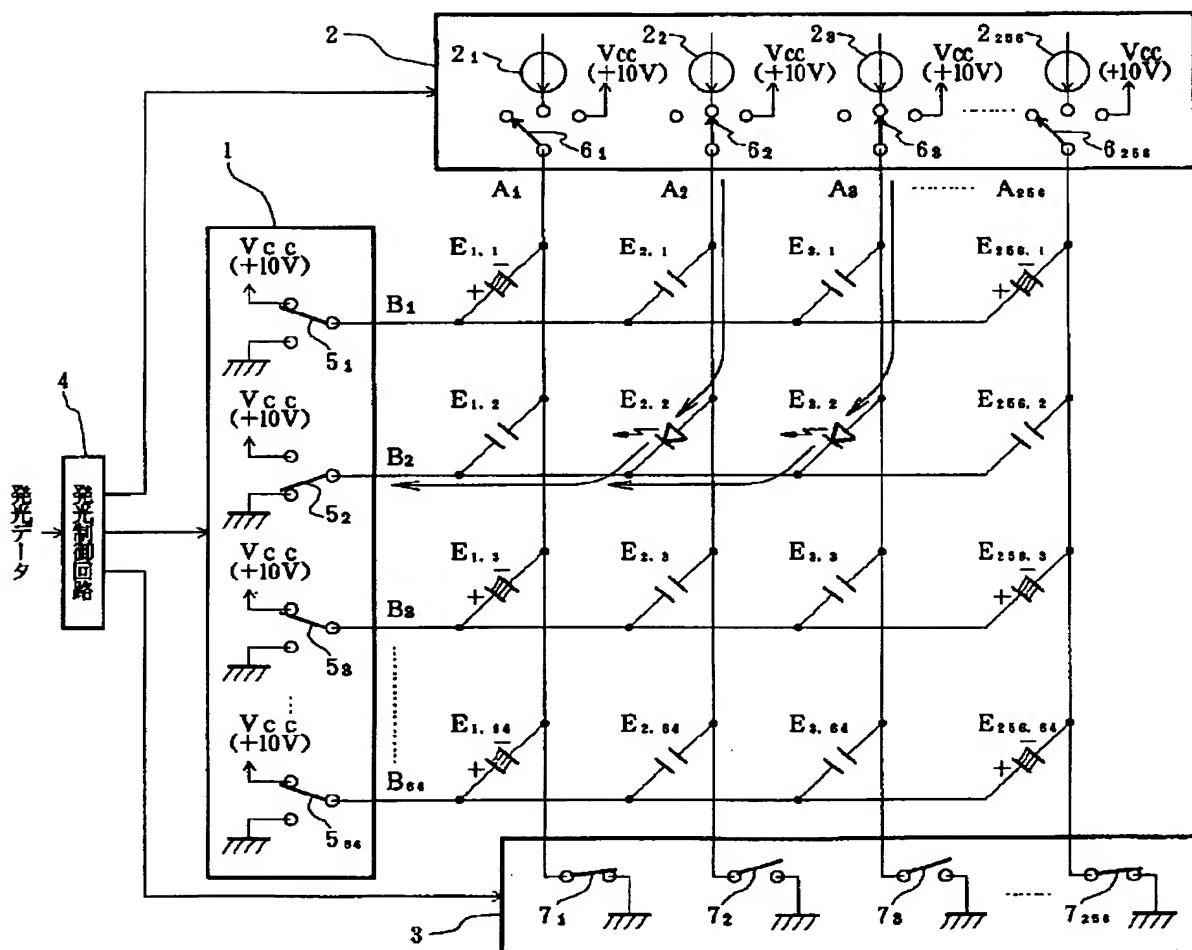
【図6】



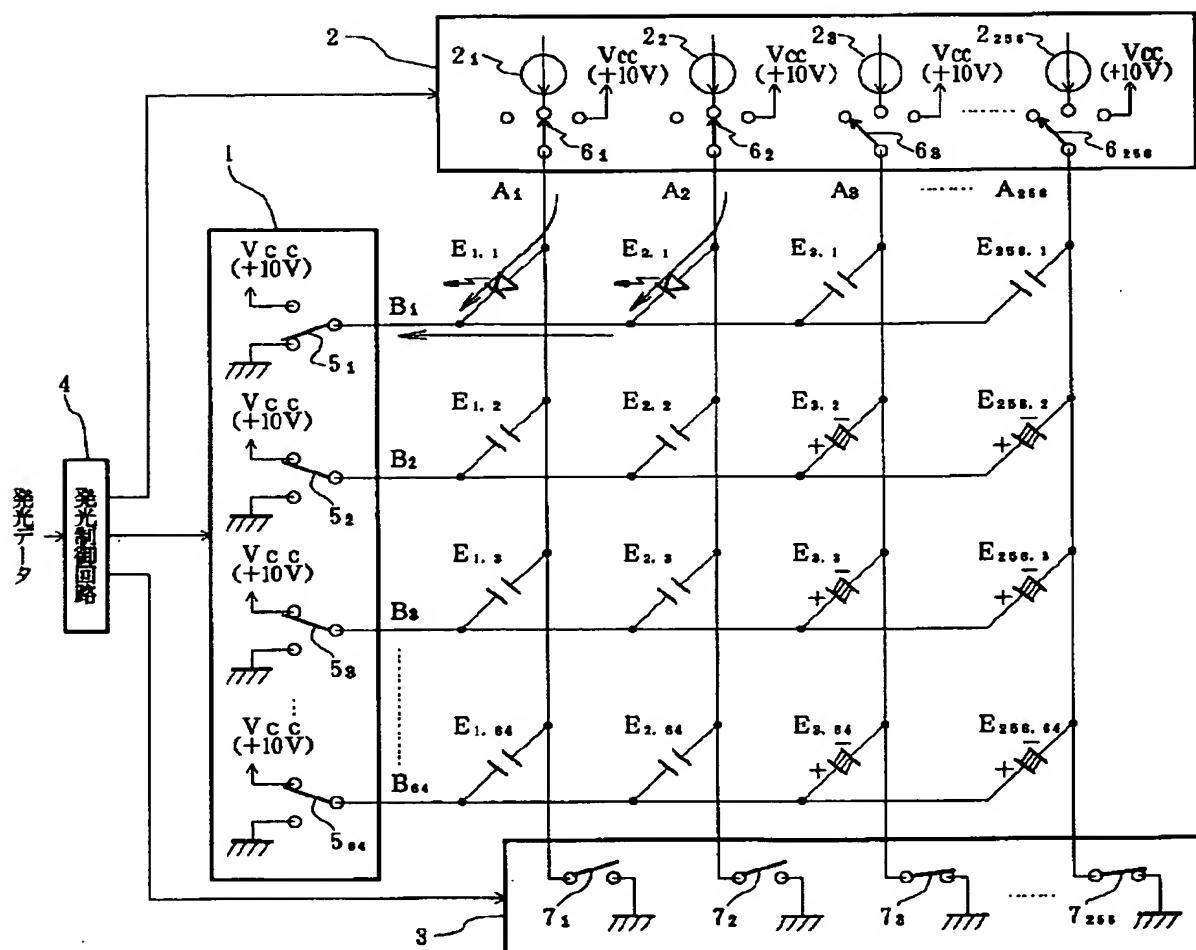
【図7】



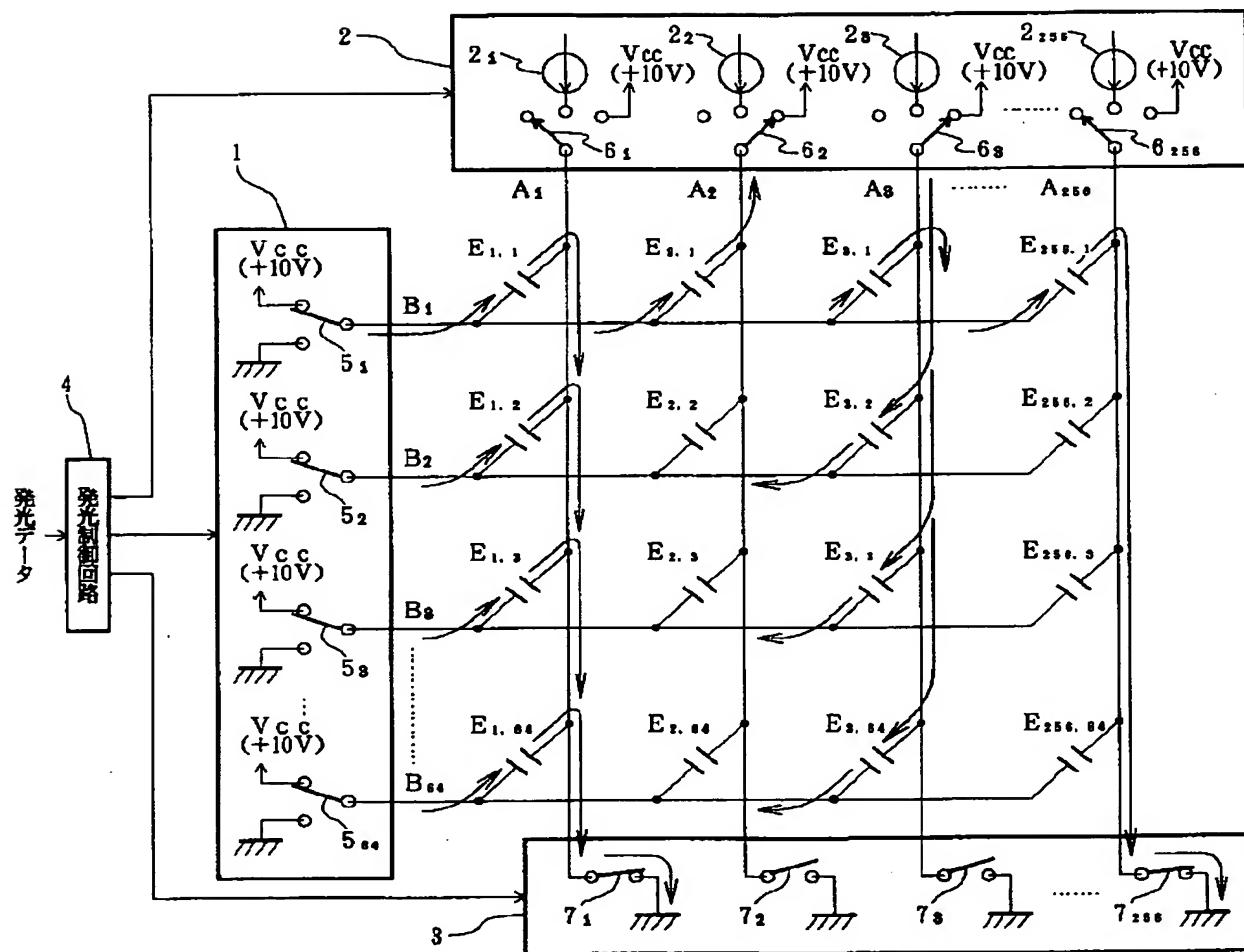
【図8】



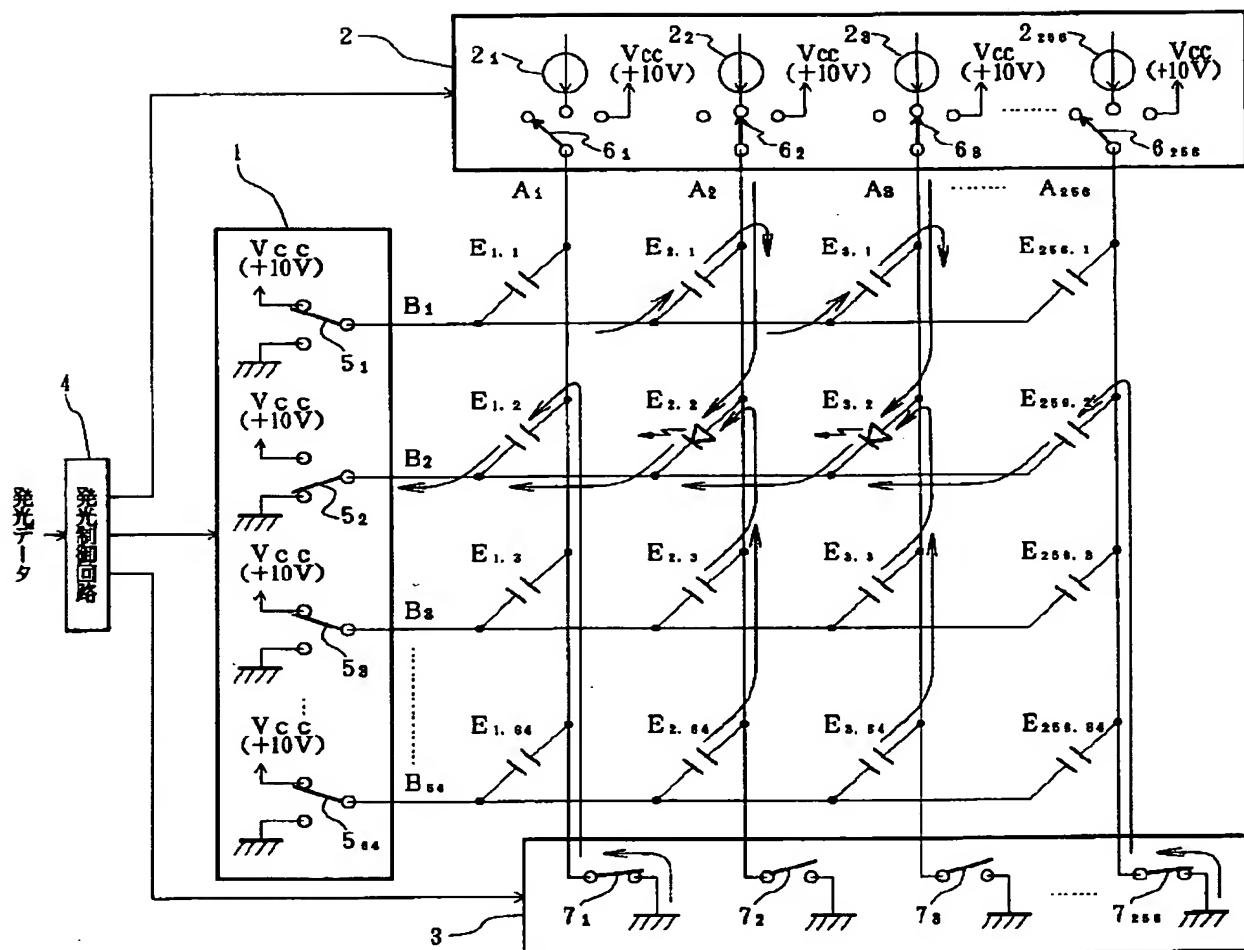
【図9】



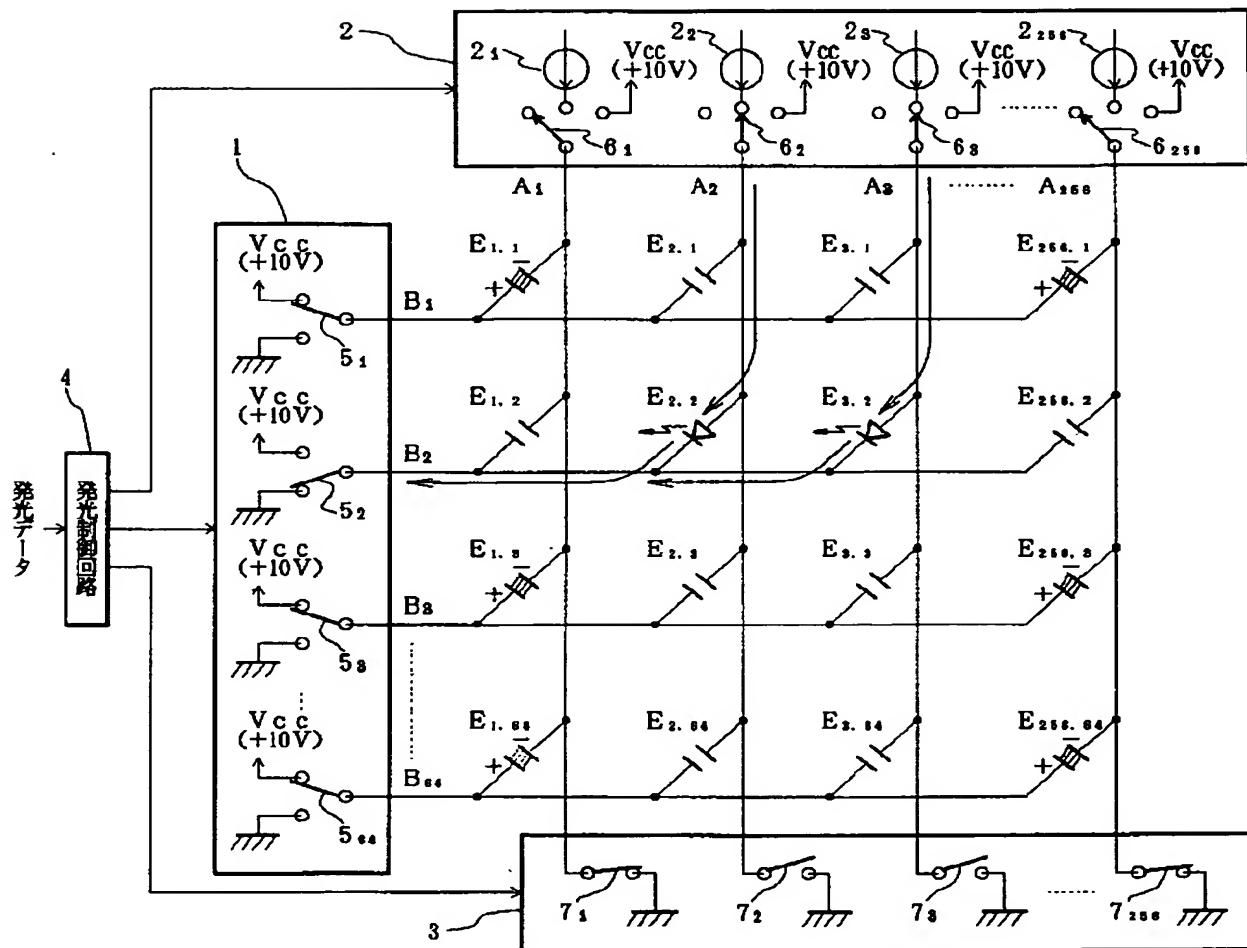
### 【図10】



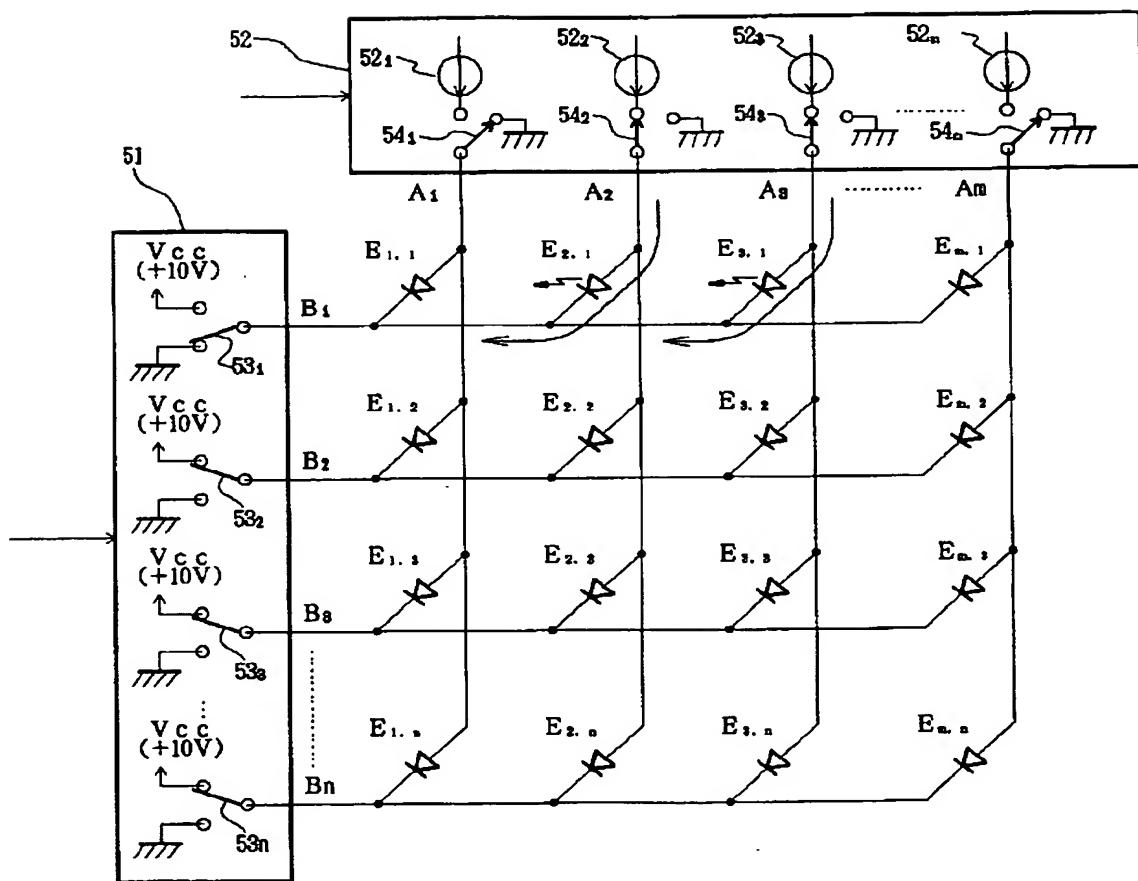
【图 1-1】



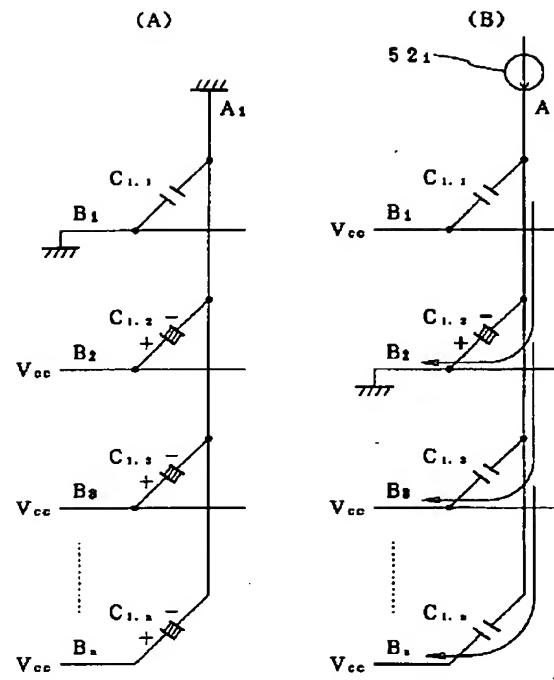
【図12】



【図13】



【図15】



【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載  
 【部門区分】第7部門第1区分  
 【発行日】平成15年6月13日(2003.6.13)

【公開番号】特開平9-232074  
 【公開日】平成9年9月5日(1997.9.5)  
 【年通号数】公開特許公報9-2321  
 【出願番号】特願平8-38393  
 【国際特許分類第7版】  
 H05B 33/08  
 【F I】  
 H05B 33/08

## 【手続補正書】

【提出日】平成15年2月20日(2003.2.20)

## 【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書  
 【補正対象項目名】特許請求の範囲  
 【補正方法】変更  
 【補正内容】  
 【特許請求の範囲】

【請求項1】マトリックス状に配置した陽極線と陰極線の各交点位置に発光素子を接続し、前記陽極線と陰極線のいずれか一方の側を走査線とするとともに他方の側をドライブ線とし、走査線を所定周期で走査しながら、該走査と同期して所望のドライブ線に駆動源を接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接続された発光素子を発光させるようにした単純マトリックス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、  
 次の走査線への切り換わり時に、すべての走査線を同じ電位からなるリセット電圧に接続することを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項2】請求項1記載の発光素子の駆動方法において、  
 前記リセット電圧がアース電位であることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項3】請求項1記載の発光素子の駆動方法において、  
 前記リセット電圧が電源電位であることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項4】請求項1～請求項3のいずれかに記載の発光素子の駆動方法において、  
 陰極線からなる前記走査線の走査が次の陰極線に移る際に、すべての陰極線とすべての陽極線をアース電位にリセットすることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項5】請求項1～請求項3のいずれかに記載の発光素子の駆動方法において、  
 陰極線からなる前記走査線の走査が次の陰極線に移る際に、すべての陰極線とすべての陽極線を電源電圧にリセ

ットすることを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項6】請求項1～請求項5のいずれかに記載の発光素子の駆動方法において、  
 ドライブ側の駆動源をすべて省略したことを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項7】マトリックス状に配置した陽極線と陰極線の各交点位置に発光素子を接続し、前記陰極線を走査線とするとともに前記陽極線をドライブ線とし、各走査線を操作スイッチにより所定周期で順次走査しながら、該走査と同期してドライブスイッチにより所望のドライブ線に駆動源を接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接続された発光素子を発光させるようにした単純マトリックス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、

陰極線からなる前記走査線の走査が次の陰極線に移る前に、すべての走査スイッチを逆バイアス電圧に切り換えオールリセットをかけ、陽極線については、次に発光すべき発光素子に対応するドライブスイッチのみをドライブ電圧に接続してプリセットし、他のドライブスイッチについて開放端に接続するとともにスイッチにてアース電位に接続することを特徴とする発光素子の駆動方法。

【請求項8】マトリックス状に配置した複数本の陽極線と陰極線の各交点位置に接続された発光素子と、前記複数本の陽極線と陰極線のいずれか一方からなる走査線のうち走査すべき走査線を選択する走査回路と、前記走査線の走査に同期して他方からなるドライブ線のうちの所望のドライブ線に駆動源を接続するドライブ回路と、前記走査回路及び前記ドライブ回路を制御する発光制御回路とを有する発光素子の駆動装置において、  
 前記発光制御回路は、任意の走査線の走査と次の走査線の走査との間に設けられたリセット期間にすべての走査線を同じ電位からなるリセット電圧に接続させることを特徴とする発光素子の駆動装置。

## 【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書  
 【補正対象項目名】0012

【補正方法】変更

【補正内容】

【0012】

【課題を解決するための手段】前記課題を解決するため  
に、本発明では次のような手段を採用した。すなわち、  
請求項1記載の発明は、マトリックス状に配置した陽極  
線と陰極線の各交点位置に発光素子を接続し、前記陽極  
線と陰極線のいずれか一方の側を走査線とするとともに

他方の側をドライブ線とし、走査線を所定周期で走査し  
ながら、該走査と同期して所望のドライブ線に駆動源を  
接続することにより走査線とドライブ線の交点位置に接  
続された発光素子を発光させるようにした単純マトリッ  
クス駆動方式からなる発光素子の駆動方法において、次  
の走査線への切り換わり時に、すべての走査線を同じ電  
位からなるリセット電圧に接続することを特徴とするも  
のである。